民俗学

９．おどる－民俗芸能－

菊地暁（folklore.lecture@gmail.com）

①芸能 performing arts 原論

「身体」を用いた芸術的表現、「観客」の存在

「信仰起源説」というパラダイム：「芸術」「競技」「遊戯」など

折口信夫（1887-1953）の「まれびと（来訪神）」論

儀礼から芸能へ：目的の意識化⇔動作の改変、儀礼が批評・鑑賞・演出・訓練の対象に

＊民俗芸能 folk performing arts

民俗行事としておこなわれる芸能（類語「民間芸能」「郷土芸能」「民族芸能」…）

民俗芸能の５Ｗ１Ｈ　いつ→定期的（盆と正月、春祭り、夏祭り、秋祭り…）

どこで→祭場（仮設的）

誰が→非専業者

何を、どのように→いろいろ

なんのために→儀礼的目的（五穀豊穣、豊漁、豊猟、健康・長寿祈願…）

・本田安次（1906-2001）の民俗芸能５分類案

①神楽：舞、湯立て、獅子舞などによる鎮魂、修祓の芸能

②田楽：農耕儀礼における予祝の芸能

③風流：雅やか、風情のあるつくりもの、仮装、群舞など　→　信仰性の希薄化

④祝福芸：祝福の詞をもたらす来訪者の芸能（ex.言霊信仰）↴

⑤外来脈：海外から伝来した芸能　→　専業化

・民俗芸能の「機能」もしくは「効果」：儀礼目的、娯楽、通過儀礼、男女交際、異人歓待…

＊民俗芸能の近代／現在

起源／構造／機能：「起源」はある芸能の「いま・ここ」を説明するものではない

演技の身体的条件→身体技法（technique du corps）論↴

演技の環境的条件→芸能の環境論（林屋 1947）→実践共同体（community of practice）論

芸能の喜び＝承認欲求！？

＊文献

折口信夫 1944『日本芸能史六講』三教書院（講談社学術文庫より再刊）

橋本裕之 2006『民俗芸能研究という神話』森話社

俵木悟 2018『文化財／文化遺産としての民俗芸能：無形文化遺産時代の研究と展望』勉成出版

福島真人編 1995『身体の構築学―社会的学習課程としての身体技法―』ひつじ書房

林屋辰三郎 1947『日本演劇の環境』大八洲出版

盆おどる会 2014『盆おどる本　盆おどりをはじめよう！』青幻社

網野善彦他編 1990-93『大系日本歴史と芸能』全 15 巻　平凡社

守屋毅 1984『日本中世への視座―風流・ばさら・かぶき』NHK ブックス

鵜飼正樹 1994『大衆芸能への旅―南條まさきの一年二カ月』未来社

川瀬滋 2018『ストリートの精霊たち』世界思想社

極りないのであります。

だからこの點については、どういふ機會に藝能が生れて來てゐるかといふことを先、考へてみることが適當であらうと思ひます。さうすれば、藝能の最初の目的も、おのづから訣つて來るか、と考へられるからであります。

平たく申しますと、藝能はおほよそ「祭り」から起つてゐるものゝやうに思はれます。だが、このまつりといふ語自身が、起原を古く別にもつてをりますので、或は廣い意味に於て、變異に起つたといふ方が、適當かも知れません。つまり宴會の形において、まつりが行はれてをりましたが、まつりの形自身も世の中が進むと共に變つて來たのです。現代人はまつりといへば、社々に行はれるまつりしか考へうかべぬ樣にさへなつてゐますが、昔のまつりは、もつと家庭のやうな、親圍氣と感情と、人間とをもつてゐるところから出來てくるのであつて、決して始終森閑として何にもないところにまつりが行はれてゐたといふ、天狗祭りの樣なことではなかつたのであります。

例へば一軒の家の中に、時を定めて非常に盛んなる饗宴が儘される、さういふ時に、既にある形に違した藝能が異つて來たものだ、といつて大體差支へないと思ひます。

前に藝能といふものは、漠然と演藝式なもの、といふ風に限つておきました。つまり、どんな藝

でも藝能となり得ぬものはない、といふことが言へるわけです。古い時代の藝は、藝能になれるやうなものだけであつた、といふことなのです。

それだから文學などといつて、やすつぽい宗教文學が行はれてゐたといふことにもなるのでせう。つまり、演劇・歌謡・曲藝・武技・相撲等といふやうなものが、すべて藝能になることが出來るものをもつてゐます。さういふものがどうして出來て來て、どうして別々の領域をもつやうになつたか、といふことを申上げてみたいと思ひます。其が此話の目的です。

前に申し述べた樣な意味のまつりにおいて、つまり神樣が出て來られなければ、まつりにはならぬのです。その點教育を受けたものが一番不幸で、神樣の現實にゐられぬまつりなるものを感じてをりますが、かへつて教育を受けぬ人には、まつりには神樣がそこに來てゐられるといふことが信じられたのです。つまり、教養のある者は、空つぽのまつりを祭りだと考へてゐるのです。此はよくないことです。

今日はそれが普通のやうになつて來てゐますが、玆にはこの點について話すつもりではないのだから、略しておきます。ともかくまつりには實際に、神樣が來られるものと信じてゐた時代の話です。それがある一つの大きな家だといふことで、推察して頂きたい。そして、もと藝能とすらも感じてゐなかつたものに、だん〳〵一つの目的が生じて來ますが、同時にまた、その目的觀が藝能を次第にまとめ、つくり出して來ることになります。

その目的觀をもつて來る動機から、先、考へてみなければならぬと思ひます。いつたい目的を生ずるといふことは、その前にある動作が固定して來なければならぬ。つまり習慣になつて來なければならない、といふことでせう。そしてその習慣を繰り返してゐるうちに、それがどういふ訣で繰返されてゐるかといふことで、その目的を考へて來ることになるのです。さうしてその目的らしいものをとり出して來て、今度はその目的に合つたやうな風に、だん〳〵藝能の形を變へて來ます。謂はゞ變改されて行く訣です。つまり、まだ藝能といふことが出來ぬ時代ですが、それが形式化し固定し、儀式の上に出來て來ます。——儀式の中には勿論、藝能化せぬものもある。——儀式が藝能だといふことを、あやしくお感じになられる方があるかも知れぬが、吾々のもつてゐる藝能は、皆さういふところを通つて、今日に至つてゐるのであります。それはともかく、かう言ふ儀式を繰り返してゐる間に、熟練して來て批評したり、鑑賞したりする自由が生じる訣です。そして、儀式をどんなに巧みに行つたか、否か、といふことが、批評や鑑賞を生み出す根本になります。

さういふ風になると、儀式は次第に藝能に變つて來ます。つまり儀式を行ふ爲に、練習といふより訓練を受ける機會が多くなり、更に藝能になると、それが演出する人の監督によつて行はれる、といふことになつて來る訣なのでせう。儀式の時代には修練を指導する人は必要であつたが、演出するといふことはない訣です。

そこでこれを引き延して考へて見ますと、かのまつりに、遥い所から神樣が出ておいでになる。更にいへば、ある晩を期し、いつも必、ある大きな家へ遥來の神が、姿を表される、といふことになりますが、其際、澤山の伴神を連れての來臨の場合が多いのです。

そこでその家の主人が、その來臨せられた神達を饗應することになりますが、その主となる神がまれびとなのです。つまり、横座（ヨコザ）の神であります。横座といふのは、左右の座に對して、眞中の座になるが、左右の方から言へば横座になる訣で、そこに坐して居られる神なのです。

そして饗宴が行はれる訣ですが、やがてその神が立つて、めい〳〵定つただけの儀式的な舞踊のやうなものを行はせます。と同時に、この時に歌謡なり或は詞章を唱へるといふことも、あつたに違ひない。我が國の後世の宴會には、この形がよく殘つてゐます。この來臨の神の行動と共に、主人側から舞をまひ、謡ふものが出て來るといふ順序になつてをります。これは恐らく主人側が先で、來臨の神の方が後と思はれるが、この點はまだ、はつきりと申されません。

これは饗宴に現れて來る神を中心とした儀式の輪廓の想定ですが、そこへ出て來た神々が、謡つたり舞つたりするといふことは、簡單なことではないので、根本には必、指導者が居て教養を與へてゐるに違ひありません。さういふ修練を繰り返したまつりの時に、實際は出て來る訣です。その點もつと詳しく神樣の姿で申してみませう。